

3. 教 育

Education

【1】平成28年度の取組

1. 新しい教養教育カリキュラムの実施

地域志向の観点による教育改革を実施し、次の5つの目的を柱とする新しい教養教育を平成28年4月より実施した。

- 主体的・能動的学修への転換
- 文理融合教育による多角的な視点や思考法の獲得
- 国際共通語としての英語能力の獲得
- 地域志向性(地域が持つ強みや課題の理解、課題解決への意欲等)の涵養
- 国際性(異文化理解、多文化共生等)の涵養

具体的には、「スタディスキル導入科目」「ローカル科目」「グローバル科目」「学部越境型地域志向科目」「キャリア教育」等の10から成る科目群を設定し、グローバルな視点を持って地域課題の解決に取り組む「地域のリーダー」の輩出を目指している。

地域志向カリキュラムのスケジュール

学年	1年 (前期)	1年 (後期)	2年	3年	4年
地域に関する科目	選択必修 ローカル科目群	必修 地域学ゼミナール	選択必修 学部越境型地域志向科目群		
キャリア教育		必修 キャリア形成の基礎	選択必修 キャリア形成の発展科目群		
地域特定プロジェクト			地域特定プロジェクト志向専門人財育成のための教育プログラム		

2. 基礎ゼミナール・地域学ゼミナール

1年次に履修する全学必修の「スタディスキル導入科目」として、前期に「基礎ゼミナール」、後期に「地域学ゼミナール」を開講した。学生の主体的で能動的な学修の技能や態度、習慣を涵養し、自らの力で社会や学問における答えのない問題に取り組んでいく探究力の基礎を形成することを目的としている。

「基礎ゼミナール」は、10名から20名程度の少人数クラスで運営され、高校までとは異なる大学における積極的な学びの姿勢を学修する。具体的には、主体的・能動的学修の体験、グループワークの体験(ブレインストーミング、KJ法)、資料(情報)の検索・収集・整理及び発表、初歩的な研究倫理の涵養などで構成されている。

「地域学ゼミナール」は、80名程度の学部横断クラスで運営され、地域をテーマとした課題解決型学修の形式となっている。具体的には、6名程度ずつの異なる学部の学生でチーム編成を行い、チームごとに弘前や津軽地方・青森県の地域課題をテーマとした問題解決学習を行う。この体験を通じ、多元的な視点や考え方があることへの認識を深め、個人・チームで主体的かつ能動的に活動する基礎的な力を培う。



3. ローカル科目・学部越境型地域志向科目

1年次から履修する選択必修の「ローカル科目」は、青森の歴史、特色、課題等について学修する。前期に、「青森の行政」「青森の経済・産業」「青森の文化」「青森の歴史」「青森の自然」等の科目を開講し、学生が青森に根付きその発展を牽引するリーダーとなるよう、青森への興味関心を高めることを目指している。

■主なローカル科目

青森の行政 - 弘前市の地方自治 -	青森の経済・産業 - 地域活性化について -
青森の文化 - 青森の手工芸 -	青森の歴史 - 写真で見る青森の近代 -
青森の自然 - 白神学 -	青森の芸術 - 青森の色感嗜好 -

他 17 科目 計 23 科目のローカル科目を開講

「学部越境型地域志向科目」は、「基礎ゼミナール」及び「地域学ゼミナール」の単位を修得した学生が2年次前期から履修する。異業種のチームワークが可能となるよう80名程度の学部横断のクラス編成で、青森に関する内容について専門知識を活用して学ぶ学生参加型学習の形式となっている。「青森の多様性と活性化」「青森の食と産業化」「市民参加と地域づくり」「青森エクスカーション」「地域プロジェクト演習」の科目で構成されている。

平成28年度は試行として「青森エクスカーション」と「地域プロジェクト演習」を開講した。

■主な学部越境型地域志向科目

科目群	科目名
青森の多様性と活性化	あおもりの暮らし
	雪国活性化論
青森の食と産業化	食生活論
市民参加と地域づくり	若者の政治参加
	地域ボランティア入門
青森エクスカーション	青森の農の可能性
	コミュニティと地域活動
	青森県のイトコ発信！
地域プロジェクト演習	弘前市の課題と発展を考える
	地域課題解決の実践（基礎）
	地域メディア活用の実践
	健康革命を学ぶ

4. キャリア教育科目

学士課程において、一貫して地域志向のキャリア形成を支援するために、1年次後期必修科目として「キャリア形成の基礎A（2単位）」を教育学部及び医学部の学生に、「キャリア形成の基礎B（1単位）」を人文社会科学部、理工学部、農学生命科学部の学生に実施した。授業内容は「キャリア形成の基礎A」「キャリア形成の基礎B」とも、「キャリア教育概論」「地域の多様な職業について知る」「大学で学ぶべきことを知る」を中心としているが、特に地域の職業人を迎えて直に話を聞き、キャリアを考える機会を設けている。

また、平成29年度以降開講を予定している「キャリア形成の発展」を試行的に実施し、71名の受講があり内容等の検討を行い、今後、2年次以降選択必修となる「キャリア形成の発展－地域で働くということ－」など「地域」「女性」「創業」の3分野で約30授業、3年次必修「キャリア形成の発展－社会と私－」の開講準備と計画を行った。

5. 地域特定プロジェクト志向専門人財育成プログラム

「地域特定プロジェクト志向専門人財育成プログラム」は、将来の「地域社会のリーダー」育成を念頭に置いたプログラムである。平成28年度はそのプログラム開発と試行に取り組んだ。

平成28年度は地域社会のリーダーを育成するにふさわしいものとするべく、学生の実践力を養う地元企業におけるインターンシップと、インターンシップをより効果的なものとするために基礎的な知識を学ぶ講義・演習で構成することとした。また、プログラムを修了した学生には本学独自の称号を付与する予定である。

平成28年度は、青森県平川市に位置する株式会社木村食品工業の全面的な支援のもとで、「次世代のりんご加工品を探れ!! -平川市で学ぶりんごのFarm to Table-」をテーマとしたインターンシップを実施した。本インターンシップにおいて、学生は食品加工の現場を知るとともに、その現場の実態を踏まえて商品開発の一端を学ぶべく、商品のパッケージデザインの改定に取り組んだ。

平成29年3月31日(金)に学生による報告会を行い、商品のパッケージデザインについて、弘前大学教職員及び地域企業関係者が集い、議論を取り交わした。

また本インターンシップにおける参加学生の取組を踏まえて、平成29年度以降のプログラムでは、学生に事前に提供すべき知識・技能として、青森県の農業経済に関する基礎知識及び農水産に関する調査を実施するための社会調査の基礎的スキルがあることを確認した。



6. 地域志向科目の実施

学生の地域志向性を涵養することをねらいとして、大学院も含め、平成27年度より90科目の増となる322科目の地域志向科目を開講した。

新しい教養教育の実施にあたり開講数を増やしたことに加え、地域人材の活用やフィールドワークの積極的導入を図り、地域志向科目を質・量ともに充実させた。その結果、学生が地域志向の教育を受ける機会が大幅に増え、地域志向の意識醸成に寄与した。さらに、フィールドワークを導入したことで学生の問題解決能力等の実践力の育成につながった。

■主な地域志向科目(学部専門教育科目)

カリキュラム所轄学部等区分	科目名
人文社会科学部 人文学部	アジア文化コース特設講義 ー地域で学ぶ地域の歴史と文化ー
	経営学コース特設講義 ー観光基礎概論ー
	経済学コース特設講義 ー自治体政策研究ー
	経済学コース特設講義 ー地域課題研究Aー
	ビジネス・シミュレーション実習Ⅰ
	社会調査実習Ⅰ
教育学部	人間の営みと文化
	雪国活性化論
	地域コラボレーション演習Ⅰ
	地域活性化論Ⅱ
	地域生活調査実習
医学部医学科	地域医療入門
医学部保健学科	公衆衛生看護学演習Ⅰ
	在宅看護学実習
農学生命科学部	農場実習
	地域ブランド農産物論

7. 教育関連FD

(1) 平成28年度弘前大学全学FD

平成29年3月8日(水)、弘前大学総合教育棟206講義室において、「平成28年度弘前大学全学FD」を開催した。

本FDは「弘前大学の三つの方針」等について共通理解を深め意識の統一を図ること及び新たなFDプログラムによる教育改善を提言し、教育改革の先導に資することを目的としたもので、今回はリーダーFDとしての側面から各学部長及び研究科長、教育関係の各委員等、教育の企画・立案に関わる教員や幹部職員を対象に行った。

はじめに、伊藤成治教育担当理事から「三つの方針」の今後の展望について講演があり、次に本学西村君平COC推進室助教から「基礎ゼミナール等のアンケート結果報告等について」と題して、スタディスキル導入科目に関する分析結果やベンチマーク等の報告があった。

引き続き、参加者から教員向けレクチャーの実施や本町地区教員向けFDの開催についての希望、ローカル科目の充実に関する方策等の意見交換があり、有意義な時間となった。



(2) 教養教育関連FD

開催日	主催	開催内容
平成28年8月9日（火）	教養教育開発実践センターFD研修会	「地域学ゼミナールの運営に向けて」
平成28年8月23日（火）	教養教育開発実践センターFD研修会	「地域学ゼミナールの運営に向けて」
平成28年9月5日（月）	教養教育開発実践センターFD研修会	「地域学ゼミナールの運営に向けて」
平成28年9月8日（木）	教養教育開発実践センターFD研修会	「地域学ゼミナールの運営に向けて」
平成28年9月14日（水）	教養教育開発実践センターFD研修会	「地域学ゼミナールの運営に向けて」
平成28年11月14日（月）	教養教育開発実践センターFD研修会	「基礎ゼミナールについて」
平成29年3月6日（月）	教養教育開発実践センターFD研修会	「基礎ゼミナールについて」
平成29年3月6日（月）	教養教育開発実践センターFD研修会	「地域学ゼミナールについて」



【2】 ルーブリック・e-ポートフォリオ

学生が地域志向の学びを深めていくためには、学生自身が明確な目標を持って、その目標に向けて絶えず自らの学びをモニタリングし、改善していく必要がある。この学修のPDCAを支援するためのツールがルーブリックとe-ポートフォリオである。

1. ルーブリック

ルーブリックは、学生が身につけるべきパフォーマンスの質を、表の形でわかりやすく「見える化」したものである。縦軸にはパフォーマンスの質を構成する要素が基準として表現されており、横軸には成長の過程が段階的な尺度として表現されている。

本学のCOC事業では、これまでに、青森県内の自治体や企業、NPOの協力のもとで、地域志向人財に必要な知識や技能、態度を集約・整理した「地域志向人財ルーブリック」を開発してきた。

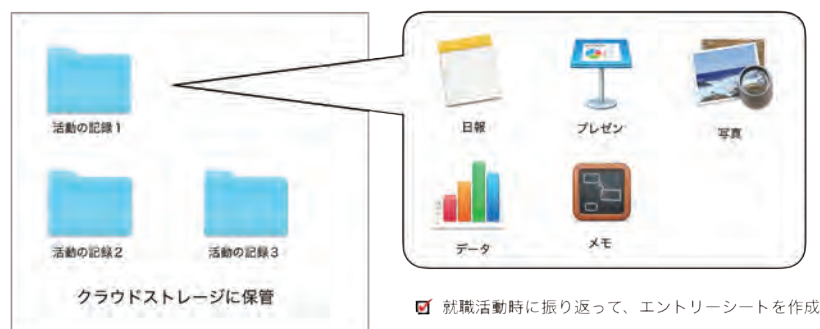
平成28年度は、ルーブリックの改定を続けるとともに、全学必修科目「キャリア形成の基礎」の一部で、学生がルーブリックについて学ぶ機会を設けた。またインターンシップにおける学修成果の振り返りの際にもルーブリックを活用し、学生が地域をフィールドに体験的に培った実践知の結晶化を促進した。

2. e-ポートフォリオ

ポートフォリオとは、学生が授業や課外活動を通して作成したレジュメ、レポート、プレゼンテーション資料、工学・芸術的作品集などを収集・整理したものである。これを電子化したものをe-ポートフォリオと呼ぶ。

本学のCOC事業では、弘前大学総合情報処理センターと連携し、e-ポートフォリオのあり方を検討してきた。この結果、本学が包括ライセンス契約を結んだMicrosoft社提供のクラウドサービス「OneDrive」をプラットフォームとすることで、学内リソースを効率的に活用し、さらに学生にとっても低コスト(手間も含めて)なe-ポートフォリオ作成支援体制が構築できるという結論に至った。

平成28年度は「OneDrive」を用いたe-ポートフォリオ作成方法について、「キャリア形成の基礎」にて、学生が学習する機会を設けた。さらに、e-ポートフォリオについては「地域学ゼミナール」において、紙媒体でのポートフォリオを導入し、学生がポートフォリオへのレディネス(構え・準備)を形成できるように促した。そしてe-ポートフォリオが最も重要となる体験的な学習の機会の一つであるインターンシップにおいて、e-ポートフォリオを作成し、学生の実践を通じた学びの結晶化を図った。



e-ポートフォリオのイメージ

地域志向人財ルーブリック

	育成する人財像	基準	尺度				無関心
			実践・貢献 4	成熟化・省察化 3	主体化・内面化 2	初歩・入門 1	
態度系	1	グローバルマインド	異なる価値観をもつ人と積極的に関わり、共生・協働できる	異なる価値観を持つ人を尊重し、その価値観を受け入れることができる	異なる価値観を理解することはできる	異なる価値観をもつ人がいることを知っている	異なる価値観をもつ人がいることを知らない
	2	地域志向 (愛着・コミットメント)	多角的な地域理解に基づき、自實的に地域に根を下ろして活動している	地域について多角的な知識を有し、その実態を複眼的に理解している	地域の歴史や文化、経済等を自ら学んでいる	地域について初歩的なことを知っている	地域に関心がない
	3	創造を目指す意欲	既存の枠組みにとらわれず、多種多様なアイデアを出すことができる	独創性を感じさせようとする高いアイデアを出すことができる	普段から積極的アイデアを出そうと努力している	現状を多少改善するような簡単なアイデアを出すことができる	現状に満足し、創造を目指すとうとしない
教養系	4	文理の基礎的な教養	文理を問わず、幅広い分野の基礎知識を体系的に学修している	文理を問わず、幅広い分野に興味を持ち、学修している	幅広い分野について学修している	自分の関心に従い、幾つかの分野の学修を始めている	知識を求めない
	5	他領域の専門家との協働	自分と異なる領域の知識や技能、考え方を理解して尊重し、柔軟に協働できる	はつきりした役割分担のもとで、他領域の人と一緒に活動することができる	異なる領域の専門家と関わることができる	自らの専門領域の中では、他者と協働できる	他者と協働できない
	6	複雑な課題にアプローチする力 (課題解決能力)	自らの知識やスキルを活用し、複雑な課題を多角的に分析できる	自らの知識やスキルを活用し、複雑な課題を分析できる	教員等の支援のもとで、複雑な課題を分析できる	単純な課題を分析できる	課題をどのように分析して良いのかわからない
専門系	7	専門的な知識・技能	専門知を体系的に理解し、その発展に貢献できる	専門知を体系的に理解している	個々の専門知を自分の中で有機的に関連づけて理解している	入門的な専門知を断片的に有している	専門知を有していない
	8	地域課題へ専門知を活用する力	体系的な専門知を活用し、実効性のある地域課題分析と解決提案を行える	体系的な専門知を用いて、地域課題の分析と解決策の提案を行える	幾つかの専門知を用いて、地域課題を分析できる	入門的な専門知を用いて、地域課題を自分なりに解釈できる	専門知を活用できない
	9	リーダーの役割	目標の実現に向けてチームを組織し、メンバーを動かすことができる	チームの個々人と関わることもできる	リーダーとしてやるべきことを知っている	リーダーの漠然としたイメージを持っている	リーダーの役割が全くわからない

【3】 地域教育プロジェクト

平成27年度より正課外の教育活動として発足した「地域教育プロジェクト」を、平成28年度も引き続き実施した。

1. ブランデュー弘前FCを知ろう！

平成28年7月3日(日)、「ブランデュー弘前FCを知ろう！」を弘前市運動公園陸上競技場にて開催し、学生6名が参加した。

弘前市内の企業と市民ボランティアの支えによって運営されているサッカークラブ「ブランデュー弘前FC」の公式戦が行われる会場の設営業務等を体験することで、地域で育むスポーツについて深く学び、地元企業の社会貢献を通して企業を捉える視野を拡げることができた。また、ボランティアスタッフやサポーター、選手との交流を通して、ブランデュー弘前FCへの愛着心を育むことができ、地元サッカークラブという地域との新しい接点を得られた。



2. やわラボに参加してみよう

弘前大学コラボ弘大1階フリースペースにて定期的で開催されている県内在住の社会人と学生の交流会「やわラボ」に、地域教育プロジェクトとして学生の参加を促し、学生延べ86名が参加した。

「やわラボ」の特徴である「和やかな雰囲気での交流」によって、初参加の学生もリラックスした雰囲気の中、様々な業種の社会人との交流を通し、職業選択の幅を広げることで、地元自治体や企業への関心度を高めることができた。



3. 哲学音楽カフェ

平成28年8月28日(日)、哲学音楽カフェ「音楽と言葉の関係性」を弘前市のスペースデネガにて開催した。

哲学音楽カフェは、本学教育学部の今田匡彦教授の専門である「サウンドスケープ」思想を体験的に学ぶチャンスを、本学の学生のみならず地域にも公開・開放するもので、学生・一般計56名が参加した。

当日は、今田ゼミのメンバーと、今田ゼミのOGである青森中央短期大学の前田美樹教授を演奏家として招き、演奏及びディスカッションを行い、学生と地域住民がともに音楽と向き合う知的な時間を過ごした。



4. 地域の担い手不足と高齢化を防ぐ in 平川市

平成28年10月31日(月)、地域の担い手不足や高齢化に問題意識を持つ自治体職員、NPO団体職員等を対象に「地域の担い手不足と高齢化を防ぐ in 平川市」を平川市生涯学習センターにて開催し、学生2名が地域活動の事例報告者として登壇した。

学生からは、東日本大震災の復興ボランティア活動や、弘前市内での障害者支援活動において、自ら参加した動機や、活動のモチベーションが向上したきっかけ等についての報告があり、参加者からは「若者特有の関心事や地域活動への参加の促し方について学ぶことができた」との感想が寄せられた。

続いて、地域課題をテーマにワークショップが行われ、地域の生の声を聞き、学生と参加者がともに地域課題の解決について考える機会となった。



5. 地域志向型サークル交流会

平成28年11月9日(水)、「地域志向型サークル交流会」を弘大カフェにて開催し、各サークルの代表者11名が参加した。

はじめに、サークルごとに取り組んでいる地域活動について報告し合い、次に抱えている課題の解決に向けてワークショップ形式で議論を行った。議論を通して他のサークルの経験を参考に、課題解決のヒントを得たサークルもあった。

地域志向型サークルが取り組む分野は各々異なっており、他分野のサークル同士が交流する機会はほとんど無かったことが判明したため、平成29年度においても、地域志向型サークル交流会を開催する予定である。

また、学生からの提案として、「地域志向型サークルの共有掲示板の設置」が多く挙げられ、平成29年度から学内に設置されることとなった。



6. 青年団の復活を目指すin新郷村

平成28年11月18日(金)、過疎高齢化によって消滅した青年団の復活を望む新郷村住民を対象に「青年団の復活を目指すin新郷村」を新郷村役場にて開催し、学生1名が、自ら参加している地元の若手主体による地域おこしの事例を報告した。

学生からは、「新郷村の課題や取組を学ぶことで、自身の地元での地域おこし活動の特徴を再認識することができ、この経験を卒業論文の作成に役立てることができた」、また、学生の報告を受けた参加者からは、「学生世代に青年団参画を促したい気持ちがあったので、参考になった」という感想が寄せられた。



7. 民具の活用・保存を考えるフィールドワーク

平成28年11月5日(土)、「民具の活用・保存を考えるフィールドワーク in 三沢市」を開催し、学生3名が参加した。

平成27年に廃館した小川原湖博物館に所蔵されていた民具を一時保管している三沢市立六川目小学校跡地にて、本学人文社会科学部の山田巖子教授、三沢市教育委員会職員とともに、現在抱えている民具の保存・活用の問題点について議論を交わした。

参加した学生全員が三沢市及び周辺地域出身だったことから、見覚えがある民具も多く、「祖母世代に民具の利用方法について聞いてみてはどうか」、「わかりやすく冊子にまとめて子ども達に伝えるのはどうか」という意見があった。



8. しめ縄づくり体験してみませんか？

平成28年12月18日(日)、「しめ縄づくり体験してみませんか？」を弘前市取上町会の公民館にて開催し、学生7名が参加した。

取上町会の恒例行事となっているしめ縄づくりの体験を通して、地域の伝統文化を守る姿勢や、過疎高齢化による参加者の減少など、地域の現状について学んだ。



9. 大学生と「子どもの貧困」ー広がる「居場所」づくりー

平成29年3月4日(土)、「大学生と『子どもの貧困』ー広がる『居場所』づくりー」を弘前大学教育学部棟1階大教室にて開催し、学生19名が参加した。

弘前大学教育学部の松本大准教授の協力のもと、子どもを取り巻く貧困問題に関心を持った学生たちが企画し、シンポジウム形式で実施した。

はじめに、八戸学院短期大学の佐藤千恵子教授や弘前市内の市民団体による事例報告を行った後、ワークショップでは、参加者全体で弘前市内の子どもの貧困について議論を交わし、今取り組むべき課題を共有した。

